新役員の抱負

後輩に何を教えるか

会長
島田隆士（高12回）

3歳時に戦争で父を亡くし、母の故郷・博多に戻って、千代校区で育ちました。成長の節目ごとに母からは「自分の命は自分で守れ」「男はひとりで生きていくもの。誰も頼ってはいけない」と諭されてきました。

福高の恩師、樋口大成先生は遺書ともいえる著書の中で「後輩に何を教えるか」という質問に「知識を教えるのではなく、文化を教えなければならない。そして若者は文化を学ぶことによって、自分自身を鍛えなければ」と記されています。

戦後70年の今、生活環境は格段によくなりましたが、豊かさを享受した裏返しなのか、思いやりや優しさ、誠実さに満ちていたはずの「日本人の心」が失われ、貧しくなっていることを日々痛感しています。

同窓会会長として後輩に何を教え、何を残すことができるのか―人生の最終コーナーに差し掛かった私への大きな課題です。母の「諭し」と樋口先生の「遺言」の中に、その課題を乗り越えるヒントがあると思い始めています。

明るく楽しく元気よく

副会長（会員拡充担当）
兼会員拡充委員長
新谷康之（高35回）

会員拡充担当の副会長を務めさせていただいております。それ以前は会員拡充委員長として、先輩方や同級生、後輩の皆さんのご支援やご協力を頂きながら、主に若手会員拡充に取り組んできました。

福高在学中、化学部の活動や自分自身のことには時間を割いたものの、福高生のお役に立てるようなことは、ほとんど行っていませんでした。加えて、口が悪かったりなどして、何人もの方に不快な思いをさせてしまった記憶もあります。そのような方々には、この場をお借りして心よりお詫びを申し上げます。

その後、さまざまな場面で人の助けをお借りして過ごしているうちに50歳を過ぎ、過去の罪滅ぼしも兼ねつつ、私も何かのお役に立てることができれば幸い、と思うようになってきました。微力ながら、今後も明るく楽しく元気よく同窓生の皆さんの交流をサポートしていきたいと思います。

「楽しく活動する」を命題に

副会長（広報担当）
岩瀬智子（高39回）

東京福中・福高同窓会と私のつきあいは、平成12年4月にアルカディア市ヶ谷で開催された総会・懇親会から始まりました。「世代を超えて呑んで笑って懐かしがって！」の筆文字がステージを飾り、400名を超える同窓生が集っていたことを思い出します。このまま自分が東京で過ごせばこうなるのだろうと想起させる先輩方の姿や、10数年ぶりに歌った校歌に深く感動いたしました。

その後、当番幹事活動への参加や、東京あさぼらけへの寄稿をうっかり引き受けたことから複数の委員会活動にかかわるようになり、揚げ句には、在校中には関係のなかった柔道部やラグビー部の関東OB会にもお邪魔していました。

同窓というご縁だけで、多くの方々にお声がけいただき、かわいがってもらいました。歳もそれなりとなり、当初の勢いはありませんが、楽しく同窓会活動をするにはどうしたらよいかを命題にがんばりたいと思います。

大隅良典さん（高15回）が平成27年度文化功労者に

人の疾患の発生や細胞のがん化抑制にも関与している細胞のオートファジー（自食作用）の仕組みや生理的な意義を解明し、細胞生物学の発展に大きく貢献したことで知られる東京工業大学栄誉教授の大隅良典さん（高15回）が、平成27年度の文化功労者に選ばれました。

大隅さんの研究論文の引用件数はきわめて多く、ここ数年は毎年のようにノーベル賞の有力候補としてマスコミをにぎわしています。大隅さんは「今後、若い次の世代が、残された課題に挑戦し、病気の克服などへと展開されることを心から願っています。またそのような環境作りに微力を尽くしたいと思います」と受賞のコメント（東工大のホームページより）を出しました。

2012年に「京都賞」を受賞されたときの大隅さん

テレビ西日本制作のドラマ『めんたいぴりり』。関東では朝4時台に放映された。福中・福高同窓会副会長を務める川原正孝さん（高20回）の父君であるふくやの創業者、川原俊夫さんの自伝が原作のドラマ。DVDも絶賛発売中

と解釈された―そんな背景があった。

今回、この取材を受けたのには、自身と同じように福高に対し、「キライ」「苦手」と感じている生徒へのメッセージになればという思いがあったという。「福高になじみ、謳歌している生徒が近くにいて、自分とは違うということで疎外感を感じるかもしれない。また、福高の先生たちがいろいろ言っていると思うけど、全部を正しいと真に受ける必要はない。なんか違うと思った感覚は、それはそれで正しいから、その感覚を大事にして生きていけと言ってあげたい」。逆説的にいえば、福高の経験が今の自分の道を見出してくれたとも語る。「好きなものに出会って弾ける前に、バネがぐーっと縮んでいた時代だった」。

＊

取材を終えて、江口さんの映像への熱い思いと物事を純粋にとらえる心に触れました。取材者として福高生を代表してまとめるならば「江口さん、福高は嫌いでも福高生は嫌いにならないでください！」。今後も続く『めんたいぴりり』ほか、江口さんの作品を楽しみにしています。